

異文化コミュニケーション研究所

2003 年度活動概要

〈2003.4～2004.3〉

刊行物

- 紀要『異文化コミュニケーション研究』第16号
- 加藤秀俊『多文化共生のジレンマ——グローバル化のなかの日本』（神田外語大学多文化共生シリーズ1）明石書店
- 『留学生支援システム構築のための International Encounter Group の可能性 研究成果報告書』サウクエン・ファン、堀内みね子、徳永あかね
- 『コミュニケーション・ガイドブック——KUIS での留学生生活をより充実したものにするために』（日本語版、英語版、中国語版、韓国語版）榎本智子、横田智美

研究プロジェクト

- ジェンダー研究会
代表：ギブソン松井佳子
- 留学生支援システム構築のための International Encounter Group の可能性
代表：サウクエン・ファン
- 異文化間教育としての留学生支援——留学生向けコミュニケーション・ガイドブックの作成
代表：榎本智子
- 日本の在日エスニック・コミュニティ研究
代表：奥島美夏
- 東アジアの近代化と社会変動
代表：加藤譲治
- 戦後日本の国際交流と文化外交
代表：和田純

- アメリカ研究プログラム
代表: 高杉忠明
- 日本・フィリピン共同映像制作を通しての異文化コミュニケーション
代表: 白盛琇

学内講演会(於: 神田外語大学)

- 第27回(6月10日): 「漂流する日本——21世紀日本の進路を問う」
河野太郎(衆議院議員)
- 第28回(7月8日): 「翻訳って何? ——ことばと文化をめぐる格闘」
尾河直哉(翻訳家・早稲田大学講師)
- 第29回(10月21日): 「母と娘、今を生きる、それぞれの生きがたさ——家族と親密圏のゆくえを問いつつ」
金井淑子(横浜国立大学教授)
- 第30回(11月4日): 「地雷除去に取り組む日本のNGOの挑戦」
今銚大介(NPO法人「JAHDS = 人道目的の地雷除去支援の会」)
- 第31回(11月15日): 「イスラームの文化的深層を探る」(※多文化関係学会年次大会への協力)
片倉もとこ(中央大学教授)
- 第32回(12月15日): 「ゴビの馬頭琴弾き ネルグイ日本ツアー 2003」
ネルグイ(馬頭琴奏者)、西村幹也(モンゴル研究者、モンゴル情報紙「しゃがぁ」代表)、嵯峨治彦(「のどうたの会」代表)、田中考子

異文研夏期セミナー(於: British Hills)

- 第13回(9月12日~14日): 「人間、こころ、宗教、そして日本人——宗教と日本人の関わりを訪ねる」
基調講演: 山折哲雄(国際日本文化研究センター所長・宗教学)
対談: 山折哲雄 + 石井米雄(神田外語大学学長・東南アジア史)

異文化コミュニケーション研究所

2003 年度活動報告

(1) 第 13 回異文研夏期セミナー

「人間、こころ、宗教、そして日本人——宗教と日本人の関わりを訪ねる」

(9月12日-14日 於: British Hills)

2003 年度の夏期セミナーは、国際日本文化研究センター所長で宗教学をご専門とされる山折哲雄先生を講師にお招きし、基調講演や石井米雄先生(本学学長・東南アジア史)との対談を通して、人間と宗教の関わりの本質を訪ねる旅となった。後掲の講演要旨にも見られるように、山折先生からは、「信ずる宗教・感ずる宗教」という端的な表現をもって、自然・風土・人間・宗教の関わり方を解きほぐす視座が提示され、きわめて示唆にとんだセミナーとなった。

この基調講演および対談は、従来と同様に文部科学省メディア教育開発センター(NIME)による衛星中継を通じて全国に配信され、また、単行本として出版すべく編集作業がおこなわれている。

セミナーに続いては研究発表が行われ、また、音声と身体技法としての言語を体験学習すべく、二つのワークショップも実施された。

プログラム(敬称略)

第1日: 基調講演「人間、こころ、宗教、そして日本人——宗教と日本人の関わりを訪ねる 信ずる宗教・感ずる宗教」

講師: 山折哲雄(国際日本文化研究センター所長・宗教学)

第2日: [午前部]

対談「人間、こころ、宗教、そして日本人」

講師: 山折哲雄(同上)

石井米雄(神田外語大学学長・東南アジア史)

[午後の部]

1) 研究発表

A グループ 司会: 御手洗昭治(札幌大学)

「異文化との出会いが生んだ日本文化、そして神祭り」

倉持益子(神田外語大学)

「プロテスタント精神と武士道」

船津明生(名古屋大学大学院)

B グループ 司会: 榎本智子(神田外語大学)

「International Encounter Group の場面性と接触性——継続型少人数グループ接触場面におけるコミュニケーションの特徴を探る」

サウクエン・ファン(神田外語大学)

2) ワークショップ

「声のことば」

講師: 児玉朗(神田外語大学)

「英語音声表現研究(オーラルインタプリテーション)」

講師: 原岡笙子(神田外語大学)

第3日: 研究発表

C グループ 司会: ギブソン松井佳子(神田外語大学)

「統合化の中のアイデンティティ維持」

ヒダシ・ユディット(神田外語大学)

「日本人越境ビジネスマンのイメージ分析」

晨光(神田外語大学)

【基調講演報告】

1. 9.11 同時多発テロとブッシュ大統領の演説

アメリカ同時多発テロ2年目の翌日に、日本人と宗教のかかわりについて話すことに、仏教でいう「因縁」を感じる。ブッシュはテロの犠牲者を悼む演説で「われわれは今死の谷を歩いて、神の御加護の下に耐え進んでいこう」という旧約聖書のダビデ王の演説から引用した一説を用いた。国

家の危機に直面し、自分を励まし、その犠牲となった家族を慰め、さらにアメリカ及び全世界に送るメッセージに旧約聖書が使われたことを、山折氏は予感していたという。また、イラク進攻に赴くアメリカの戦車隊員たちの胸のポケットにはお守りのように「毒蛇とまむしを踏みにじり神と共に進軍しよう」というモーゼの詩の一説が入っていたという。この場合の毒蛇・まむしとは異教徒のことであろう。この言葉と共に進軍したアメリカ中心の軍に、イラク側はジハード(聖戦)という言葉をもって対抗した。

危機的状況の中で戦いに立ちあがろうというときは旧約聖書の言葉で、平和の秩序を回復しなければならないときにしばしばもちだされるのが新約聖書である。旧約聖書の神は、怒りの神であり、罰する神である。それに対して新約聖書は、許しと愛の神といえる。旧約の神と新約の神は、今までも歴史の中でうまく使い分けられてきた。

今回のイラク進攻も含めて歴史上かつておこった戦争は、文明の衝突、宗教の対立が原因であると短絡的にいうことはできないが、その底流にはユダヤ教・イスラム教・キリスト教の問題が伏流水のように存在している。西洋社会というのは、グローバリゼーションといわれるようにその社会システムを普遍的価値観として世界に広げていこうとする積極的な意志をもっている。その際に、旧約的なムチ、新約的なアメの価値観を戦略的に使いわけている。

翻って我々は、危機に際して旧約の言葉のように人々を奮いたたせるような言葉をもっているとはいえない。それに匹敵するようなものはないということは何を意味するのか。

2. イスラエルの旅——砂漠の 150 キロと聖地エルサレム

阪神淡路大震災・オウムの子リン事件がおこった 1995 年以降、日本人は宗教とか精神的世界に関する感受性がかわった。天災や宗教に人力をこえた恐ろしさを感じ、日本人の心の根拠はどこにあるのかを反省する気持ちがこの年に生まれたのではないか。

この年の秋、山折氏はイスラエルにゆき、イエスが伝道活動した道をたどる旅をした。イスラエル北方のナザレは、砂漠に石造りの家がぽつんぽ

つんとある場所であった。そこは、エルサレムまでの150 km いけどもいけども砂漠で地上に頼るべきものなど何もなかった。ガリラヤ湖やヨルダン川にいたっても周囲は砂漠であった。このような頼るべきものが地上に一切なく、はるか天上にのみ、それを求めざるを得なかった世界こそが一神教のうまれる風土である。

エルサレムにはユダヤ教徒の嘆きの壁とイエスキリスト昇天伝説の聖墳墓教会、それにイスラム教の信仰の場所で聖なる大岩のドームが、すぐ近くにあり、一触即発の状態で危うい均衡を保っている。そして、すぐ近くにありながら異教徒が訪ねあうことはない。日本の四国八十八箇所などの聖地巡礼など多神教的世界における聖地巡りは常に円運動であり、一カ所の中心的聖地について帰ってくるような往復運動はしない。ユダヤ教、キリスト教、イスラム教信者がそれぞれの宗教をこえた聖地めぐりをするようになれば、パレスチナ、イスラエル問題の解決の糸口が見つかるかもしれない。しかし、山折氏の帰国直後、パレスチナ和平に貢献したとされるイスラエルのラビン首相が暗殺されたというニュースがながれた。

3. 天然の無常と慈悲の道徳

砂漠地域からうまれた一神教に対し、日本は八百万の神がすまう多神教的な風土をもっている。この日本の風土について語った二人の人物がいる。それは、物理学者寺田寅彦と哲学者和辻哲郎である。寺田は日本人の自然観を西ヨーロッパと比較した。西ヨーロッパは概ね地震が無く安定した自然条件の中にある。イギリスの石造りの館などは、かわることのない永遠性を印象として与える。一方日本の方は毎日のようにどこかで地震がおきるなど自然は不安定であり自然はコントロールできないものであるとハナからあきらめている。ゆえに日本人は自然と共に生きる知恵を身につけた。その結果、仏教が入ってくる遙か以前に、日本列島にすむ人々の心に「天然の無常観」ともいえるものがうみだされていった。生きているものは必ず死ぬ。永遠にかわらぬものはないといった考えが、もっとも根本的な宗教観として日本人の心にあると寺田は語っている。

一方和辻は「風土」の中では、寺田がキーワードとした「地震」には言

及せず、台風をもちだして論じている。毎年、同じような時期に同じようなルートでやってくることから、協力して事に当たる共同体が育っていったとする。和辻は倫理学者としての立場から、人と人が助けあう心が、仏教でいうところの「慈悲」につながるという「慈悲の道德が日本人にはあると考えた。日本人にとっては、特に近代以降、宗教と道德は入れ替えが可能だったのではないか。

4. 庭と自然——神仏共存の共鳴盤

近年京都見物をする人にある傾向が認められる。お寺の本堂前で祈っている人がほとんどなく、本堂を出、庭に出たときに立ち止まり、みいつている人が多いようだ。庭を見ることで心の平安を求めているのか。日本人は、仏を本堂では感じず、庭の草木に感じているのか。そして、その庭のかなたには京の山並みがみえる。庭はまさに心の共鳴盤である。

日本の仏教が本当に日本人のものになるのは、平安時代であろう。最澄の比叡山、空海の高野山に代表される山の中での修行からうまれた平安仏教が始まりといえる。その仏教は山とその地に鎮まっていた神々を尊重し、その脇に仏の本拠地をつくった。例えば比叡曼陀羅・熊野曼陀羅は、山を中心とした自然を曼陀羅にし、その中に仏塔と社殿が棲みわけをしているかのように存在している。まさに、神と仏が共存していた。

日本の歴史には、戦乱をはさんで長期に続いた平和な時代が2回あった。それは、約350年間の平安時代と約250年間の江戸時代である。これは、パクスロマーナやパクスブリタニカ、パクスアメリカナのような覇権による平和とは異なる。神と仏の領域を棲みわけ、平和共存していたことが重要な役割をはたしていたのではないだろうか。日本の自然、山岳が神々と仏の世界を大きく包みこむ共鳴盤のようなシステムをつくっていた。そのため日本人は、宗教を語る時、絶えず自然と重ねあわせ、自分たちの信仰心を語り続けてきた。

5. 道元と良寛——美と信仰

季節の移り変わりの中に無常を感じ、心のあり方を反省する。このよう

な日本人の感性をもった代表的人物として鎌倉時代の僧道元をあげる。道元は、難解な思想をもち、晩年永平寺に籠り弟子たちに厳しい修行を課したことで知られる僧である。信仰にいきた道元は、美意識においても優れた感性をもっていた。川端康成によってノーベル賞の授賞記念スピーチで引用された「春は花、夏ほととぎす秋は月、冬雪さえて涼しかりけり」という歌がある。春は花の中に、夏はホトトギスの声に仏はいる。春夏秋冬、自然は仏の気配にみちている。この歌から川端は、日本人の死生観と美意識をみいだしていた。

宗教の最高形態は芸術であり、芸術の最高形態は宗教である。日本人は信仰と美の世界は表裏一体と感じてきた。それは日本の自然的景観と深いかわりがある。

道元に影響を受けた人物で近世末期の僧良寛も自然の中に信仰と芸術を見出した一人である。最澄、空海、西行など日本の仏教の代表者たちは、全てのように終生和歌と書を手放さなかった。その一人、良寛が遺言のようにつくった歌がある。

「形見とて何か残さん春は花、夏ほととぎす秋は紅葉」

これは、形見は何も残さないが、四季の美を見て自分をしのんでほしいといった意味である。生と死を見据えた無常観の上に自然をじっとみつめている。

このような宗教的美意識は、はるか万葉の時代から千年以上も受けつがれてきたものであり、日本独特の宗教観といえるだろう。

6. 「心」イズムと無の信仰——感ずる宗教の配電盤

一神教は、神を信じるか否かという宗教である。日本人の信仰心は自然の中に神や仏の気配を感じるか否かというところに重要な特徴がある。宗教といえば、一神教的な信ずる宗教のパターンで何事も考えがちであるが、世界には「信ずる宗教」があると同時に「感ずる宗教」もあるのだということを、我々はこれから国際的な場面で主張していく必要がある。そのためには、まず我々が我々自身の文化や伝統や宗教心が存在するのだという

ことを、しっかり理解し、自覚していくことが必要なのではないかと思う。

〈倉持益子・本学留学生別科〉

(2) 第 12 回異文研夏期セミナー基調講演出版

2002 年度の夏期セミナーには加藤秀俊先生(国際交流基金日本語国際センター所長・社会学)をお招きし、グローバル化の進展と相互理解の相克をめぐる諸側面に焦点があてられたが、この基調講演を大幅に改訂されたものを次のタイトルで刊行した。

加藤秀俊『多文化共生のジレンマ——グローバル化のなかの日本』(神田外語大学多文化共生シリーズ 1) 明石書店

同書は、異文研が新たに発足させた「神田外語大学多文化共生シリーズ」の第 1 冊目となるもので、同シリーズは、多文化共生の課題をさまざまな切り口から探るべく毎年数冊の刊行をめざすものである。

(3) 研究会成果報告

●留学生支援システム構築のための International Encounter Group の可能性(代表: サウクエン・ファン)

1. 研究プロジェクト発足の経緯

2000 年 9 月神田外語大学留学生別科が開講し、2001 年 4 月から国際コミュニケーション学科と国際言語文化学科新設に伴い学部留学生受け入れも開始した。これは留学生にとっては本学での学生生活の始まりであると同時に、留学生受け入れ側の学生・教職員にとっても異文化との遭遇の機会が増えることを意味する。留学生教育は日本語教育プログラムの提供を中心として受入体制の整備、サポートネットワークの構築を含んだ日常生活および勉学上の総合的な支援が必要である。本研究では、このネットワーク体制作りの基礎となる基本的な人と人との出会いを通して留学生支

援の場を提供すると同時に、そこでおこなわれる異文化コミュニケーションを分析し、IEGの意義を考える。

2001年度4月から異文化コミュニケーション研究所の助成金を受けた共同研究プロジェクトの3年目が終了予定で、現在報告書作成にむけた最終作業中である。

2. 研究組織

1) 研究代表者

サウクエン・ファン(神田外語大学・国際コミュニケーション学科・助教授)

2) 研究分担者

堀内みね子(神田外語大学・言語教育研究所・講師)

徳永あかね(神田外語大学・留学生別科・講師)

崎三千代(2001-2002年度のみ、当時神田外語大学・留学生別科・講師)

3) 研究協力者

神田外語大学外国語学部学生 12名(うち留学生 5名)

神田外語大学留学生別科学生 10名

3. プロジェクト期間

2001年4月1日から2004年3月31日まで

●異文化間教育としての留学生支援——留学生向けコミュニケーション・ガイドブックの作成(代表: 榎本智子、横田智美)

1. ねらい

神田外語大学では留学生教育開始から5年目を迎えるが、当プロジェクトは本学留学生支援の一助となることをめざして、2002年3月から留学生向けの『コミュニケーション・ガイドブック』の作成をおこなってきた。修学・生活上のコミュニケーションや異文化適応について記述し、異文化状況下で直面しがちな事柄をガイドブックを通して学んでもらうことがね

らいである。

また近年、留学生支援は単なる「世話業務」から、留学生も日本人も共に学びあうことのできる「異文化間教育の実践」につながりうる活動と捉えなおされてきたが、当プロジェクトも留学生支援活動を異文化間教育実践の絶好の機会と位置づけ、可能な限り留学生と日本人学生の交流や相互理解が深められるように活動してきた。

2. 活動実績

2004年3月、ガイドブック第一版を刊行した。前半は異文化コミュニケーションや異文化適応に関する概論を記載し、後半には本学で学生生活を送るにあたってしておく便利な情報を掲載した。ガイドブックは日本語の他に中国語、韓国語、英語に翻訳し、学部留学生のみならず、日本語読解力がまだ十分でない留学生別科の学生にもよんでもらえるようにした。

当ガイドブックは留学生のニーズに即した内容となることを常に心がけ、質問紙調査をして現状を把握した上で内容の策定をしてきた。また、インタビュー調査を通して留学生が体験しがちな事例を収集し、異文化コミュニケーションの観点から解説をくわえて紹介している。

なお、異文化間教育実践のために活動当初から日本人、留学生メンバーを募り、実態把握調査の実施・分析から内容策定、原稿執筆、他言語への翻訳まで関わってもらい、体験的に異文化理解を深めてもらった。

3. 今後の予定

留学生のニーズに即した内容であり続けるために、これからも必要に応じて改訂していく予定である。また、今後は本学の留学生会と連携を図り、より学生主体の活動にしていく計画である。

●ジェンダー研究会(代表: ギブソン松井佳子)

1. 研究会メンバー:

青山治城、岩井美佐紀、小菅伸彦、児玉顕栄、子安昭子、樋笠勝士、ユディット・ヒダシ、藤田知子、白盛D、山領健二、ギブソン松井佳子

2. 共同研究プロジェクトの問題意識の所在

近年のジェンダー概念の普及に伴い、「性」認識が生物学的基盤論ではなく、社会的/文化的/歴史的に構築された性差およびその関係論として捉えられるべきであるという視点の有効性は確認されつつあるが、もっと根本的な問題つまりジェンダー概念が意味するものが一体何なのか、なぜこの概念の導入が必要なのかといったといかけについての検討は十分におこなわれてきているとはいえない。この研究会はいわば理論と個別の現象という2本の柱を用意してお互いがお互いの触媒になるような形で編みこんでいくことをめざしている。つまり一方でさまざまな現場のジェンダーをめぐる具体的で切実な問題に向きあいながら、もう一方ではジェンダー理論構築のための知的葛藤も引きうけるという姿勢である。性差をめぐる従来の固定化された二項対立的な認識論(本質論か構築論かという)を切り崩しながら、これまで無自覚にも自明視してきた自らの行為や発言がいかに関与してジェンダー化されたものであるかを内省し検証/解釈しようとするものである。ジェンダー問題の多様なあらわれをメンバー独自の切り口で問題化することで、研究の多層性/重層性を保持していきながら論集作成へとつなげていきたいと考えている。

3. 活動内容:

2003年度は、以下の通り月例会を開き、報告者の発表についての活発な意見交換をおこなった。

2003年

4/23(水) 本年度の活動計画についてのディスカッション

6/18(水)、7/16(水)、9/17(水): 合評会『21世紀のジェンダー論』(報告者はもちまわり)

10/15(水) 「ジェンダーとリテラシー問題」(報告者: 藤田知子)

11/19(水) テクスト・クリティーク: 金井淑子「親密圏とフェミニズム」『親密圏のポリティクス』ナカニシヤ出版(報告者: ギブソン松井佳子)

2004年

1/7(水) 「ソフォクレスの悲劇——『アンティゴネー』をめぐる」(報

告者：樋笠勝士)

2/18 (水) 「男女共同参画社会とジェンダー問題」(報告者：青山治城)

4. 今後の課題

当研究プロジェクト予算でジェンダー関連図書の充実も計られてきていることも鑑み、来年度はジェンダー研究の基本文献データベースの作成に着手したい。そして形にすることで求心力が増すことを期待して「経済」「政治」「法学」「言語学」「哲学」「文学」「社会学」「メディア論」「コミュニケーション論」といった視座を援用した論文集へと結晶化させていきたいが、その際に〈ジェンダー〉という変数を〈宗教〉〈人種〉〈言語〉〈ステータス〉〈年齢〉といった他の変数との組み合わせ/擦り合わせが不可欠になることを確認しておきたい。また発想をやや異なる角度でシフトすると、ジェンダー問題を多文化共生の立場から考察できるのではないだろうか。いずれにしてもジェンダー概念自体の絶えざる問いなおしを続けることで研究会を続行していきたいと考えている。

(4) 学内講演会(於：神田外語大学)

●第 27 回(6 月 10 日)「漂流する日本——21 世紀日本の進路を問う」

河野太郎(衆議院議員)

「政治家を『先生』と呼ぶのはおかしい慣習ですよ…ぼくは『太郎さん』がいいですね」。気負いのない笑顔で会場に挨拶する河野太郎氏は、1996 年の第 41 回衆議院総選挙いらい活躍しつづける、フットワークのよさで名をはせる議員だ。

21 世紀日本の進路を考える際、経済、社会、教育、外交・安全保障における「改革」がとわれているが、今回の講演会では「政治」に焦点をあて、党派をこえて、新世代の感覚から日本の政治改革を訴えてきた河野氏を迎えた。彼がめざすものは、日本で「もっとも遅れた分野」だという政治の改革のために、なによりもまず、政治離れした日本人の、特に若い世代の

興味と理解をうながすことだという。学生ボランティアの政策スタッフ陣、シンクタンクのメンバーと環境政策などを協議する「太郎塾」の設立、ホームページの開設 (<http://www.taro.org>) などからもわかるように、一見ユニークだが地道な諸活動には、政治を身近に感じられる場をつくり、単なる政策批判でなく新たな代替案を考えだすところまで責任をもつ姿勢を広く共有したいという願いが反映されているとのことだ。

河野氏の活動の原動力は、自身の経験の中からうまれてきたという。大学で政治学を専攻したのち、1984年に留学したワルシャワの中央計画統計大学で、河野氏は、共産党の独裁政権下にあったポーランドの深刻な食料不足や反政府運動への弾圧をまのあたりにする。当時自宅軟禁中のワレサ書記長を訪問したため、留置場に拘束もされた。そうした「名ばかりの議会があっても、民主主義があるとはいえない」状況への遭遇は、政治に関わる原体験となった。米国の大学を卒業し、会社勤務を経て、1996年から河野氏は日本の政界に足をふみ入れることになる。

議員として活動を始めたある時、衆議院本会議での議決に際して「異議はありませんか」とどう議長に対し、河野氏ら数人の自民党議員が「異議があります」と応じたところ、「異議なしと認めます」との一言で会をしめくくられてしまったことがあるという。衆議院本会議にはシナリオがあって、議長がそのシナリオ通りに進行しさえすれば会議はつつがなく運ぶようになっており、仮にその通りにいかなかった場合でも、既存の筋立てに反するような「現実」はおきていないものとして処理されるのが国会の現実らしい。そればかりか、異議のでないはずのところでも「異議あり」の声があがったということで、国会対策委員会などの幹部は「根回しがたりなかった」と譴責すらされたという。また、別な臨時国会の特別委員会で、河野氏が法案採決に反対の立場をとったところ、自民党の委員会理事に呼ばれて委員をクビにされたこともあるという。議員は党の方針には絶対服従ということのようである。

「このように、筋を通そうとするたび理不尽な顛末におわるのはなぜか。それは、近年の日本における民主主義のマヒのために他ならない」と河野氏はいう。「日本の政界には“政府与党”という言葉があって、与党議員は

誰でも政府の政策に賛成するのが当然とする暗黙の了解がある。政策の決定には与党の幹部も参加しており、幹部は身内の議員から反対がでるような“失態”がおこらぬよう、日頃から党内をしめつける。しかし、こんな党議拘束システムは日本独自のもので、政府の職についていないかぎり、与党議員であっても反対する自由と権利がある。なのに、ここ数十年、特に高度経済成長期以降は、事なかれ主義的にトップに迎合し、あらかじめ成立した合意にしたがって議事の進行を妨げないのが民主主義であるとしてとりちがえている」との河野氏の指摘は鋭い。政治がきちんと課題に直面し、大胆な改革なしには日本の政治や経済の向上はない。そのためにも、真の民主主義が実現され、それにもとづいた議会が成立していることが不可欠だということだろう。

また、国際情勢の中でも日本は不利な立場にたたされることが多いと河野氏はいう。国連財政の例では、分担金拠出国の第1位はアメリカ(23-24%)だが、意外なことに第2位は常任理事国でもない日本(約20%)で、その分担額は、常任理事国であるイギリス、フランス、ロシア、中国の4大国の分担額合計よりも大きい。にもかかわらず、日本人の国連職員への採用率は極めて低い。この現実には、日本はなぜ異議申し立てをしてこなかったのか、積極的なアピールが必要だと河野氏は強調する。アジア地域における世界の関心が日本から中国に移行しつつある現実もあり、中東への自衛隊派遣といった米国に都合のいい時だけ同盟を強調されても、日本側からはまともに反論できない構図ができあがってしまっているのだとも河野氏は指摘する。

最後に、「これまでも日本政府は、日米安全保障条約、米軍基地問題、ODAなど、きちんとした説明をしてこなかった。対決を避けて通ろうとする姿勢が長年の間につみ重なり、果ては国民の政治離れを促してきた。こうした諸問題をさげずに、正面から議論し、誤解をひとつずつといていくことが、議員としての自分の課題である」とのべて、河野氏は今後の政治改革にむけて尽きることのない意欲を示した。このメッセージのみならず、一見淡々としながらもたゆまず闘いつづけようとする一貫した姿勢には、党派や主張のちがいをこえて聴衆も共感をおぼえたようである。とくに学

生たちにとっては、年齢的にも近い等身大の議員の姿は、政治との距離を改めて考えなおす大きな刺激となったようだった。

●第28回(7月8日)「翻訳って何? ——ことばと文化をめぐる格闘」

尾河直哉(翻訳家・早稲田大学講師)

私たちの大学はもとより、「外国語」や「国際」を銘打つ大学の学部や専門学校は多く、その大半の生徒は専攻をいかした職業、たとえば翻訳や通訳といった分野で活躍する日を夢みて日々励んでいるのではないだろうか。講師の尾河直哉氏は、アナル派歴史学の草分けフェルナン・ブローデルに関する研究書『ブローデル帝国』(共訳、2000年、藤原書店)、『入門・ブローデル』(2003年、藤原書店)などを翻訳するかたわら、大学で後進の指導にもあたっている。尾河氏は今回、自らの体験をもとに、語学力と翻訳能力が必ずしも一致するわけではない翻訳業の苦労を具体的に解説したばかりでなく、翻訳業界の構造とその中で「プロ」の翻訳家であるための諸問題をも率直にかたった。終演後、学内の学生たちからは、「翻訳業は思っていたイメージと大分違うことを教えられた」「自分が翻訳家になるために何をすべきかがはじめて実感できた」といった多数のメッセージがよせられた。

バブル崩壊以前の1990年代、「翻訳学校」と名のつく機関はおよそ100前後あり、どれも大盛況だったといわれる。しかし、その中の何割も翻訳に関連した仕事にありつけない。さらに、「翻訳家」といえばそれだけで身をたてているかのように響くが、実際そんな人々は翻訳業に携わる人口のほんの一握りにすぎない。というのも翻訳業はまず、各種企業や研究機関から依頼された雑多な文書を訳す「産業翻訳」と、海外の小説や専門書などを訳本として日本で出版する「出版翻訳」とにわけられる。前者は当然ながら後者より需要が多く、業界の所得総額は年間400億円といわれるが、訳されたものは個人の業績になりにくく、作品としてのヒットもめったにない。一方、出版翻訳は年間数千点が刊行されており、総収入は30億円以上にのぼるが、これはいわゆるフリーの翻訳家千人強の手によっているの

で、きわめて厳しい状況といわざるをえない。さらに内訳をみると、年に3冊以上訳本が出せる人間は100人弱、継続的に翻訳の依頼を受注できるのも約100人、そしてこの中で出版のみで食べていける者はたった十数人のみである。翻訳学校を卒業しても、千人に一人がこの中に入れるかどうかというところだ。そして、実際に活躍している翻訳家たちの多くは、大学その他の教員や研究員の肩書きを持っており、副業として翻訳を続けている。つまり、翻訳を学びに来る学生たちこそが翻訳業界を支えているという構造ができあがっているのだ。翻訳家を目指す若い世代にとっては「だまされた」感すらある、何とも夢のない話かもしれない。

では、なぜそれでも翻訳をめざすのか。それは翻訳が楽しいからに他ならない、と尾河氏はいう。訓練をつむためには、まずある程度の量を読みこなさなければならない。だが、一定レベル以上の専門書や優れた文学作品はむしろ「ゆっくり読む」事が大切になってくる。何度も、そしてわずかな量にたっぷり時間をかけてよむことは、忙しい現代の情報社会では非常な贅沢であり、その作品の中に深く没入してゆくことができる。そのうえで、翻訳は日本語を駆使して原文の雰囲気や再現したり、自分なりの演出を試みたりできる知的な作業であり、それを他人がよんでくれるという喜びがある。単なる情報のみならず、各国の文化は全般に翻訳によって私たちの国に伝えられてきた。だが現代では、原典の「模倣」、すなわち原文を忠実に訳すだけでなく、翻訳家のオリジナリティもがとわれている。さらに日本では訳者名を表にだして刊行できるので、そのために個人の業績としてもかぞえられるのだ。

魅力ある翻訳を手がけるためには、つねに新しい言語表現を創りだしていく必要がある。そのためにも、私たちの使う日本語の特徴をよくしていなければならない。例えば、誰でも学生時代の和訳の授業で経験したことのある人称代名詞の問題がある。「彼/彼女」のような語は、かつて英文解釈の便宜上使われていたはずの代名詞だったが、学校の制度化に伴い、和訳として定着してしまったものらしい。この耳につく、ともすれば無機質に響きがちな言葉をいかに処理するのか。尾河氏はその例を、歴代の翻訳家たちの業績から抜き出し、比較しながら解説する(山岡洋一 2001 「翻

訳とは何か——職業としての翻訳」日外アソシエーツ、40-41頁参照)。また、柳瀬尚紀の「翻訳はいかにすべきか」(2000年、岩波新書)のように、「彼/彼女」をいちども使わずに見事な訳文を展開する方法もある。

さらに欧米人がよく理解に苦しむ日本語の主語もある。例えば「こんにゃくはやせる」という文では、いったいどれが主語なのか? 「象は鼻が長い」といった表現は、主格はどこで、何を強調したいのか? 実は東南アジア(マレー語など)にもよく見られるこの種の表現は、論理的には曖昧かもしれないが、情緒的には非常に豊かなアジア的描写方法なのだ(三上章1960「象は鼻が長い」くろしお出版、金谷武洋2002「日本語に主語はいらない」講談社選書メチエなども参照)。そのことを反映させて、日本人がその内容に自然な共感を抱くような翻訳を工夫するのが、翻訳家の醍醐味であるといえる。

上記のような実用的な翻訳例と参考文献を紹介しつつ、尾河氏は翻訳への道のりの遠さ・険しさと、しかしながらそこへ到達したときの大きな喜びとを伝えることで、今まさに語学に取り組む学生たちにエールを送りながら講演を締めくくった。

●第29回(10月21日)「母と娘、今を生きる、それぞれの生きがたさ——
家族と親密圏のゆくえを問いつつ」
金井淑子(横浜国立大学教授)

ひきこもり、摂食障害、リストカット、家族内の虐待…現代社会のかかえる精神的問題は、俗に自傷ないし他傷行為といわれるさまざまな形の暴力として表出している。近年とみにメディアを騒がせているこれらの危機的状況は、どのような原因や過程を経ておこったのだろうか。

この問いとむきあう金井淑子氏が、上記の講演タイトルのように女性に焦点をあてて論じたのには、二つの理由がある。ひとつは女性問題に関する世界的イデオロギーの潮流、すなわちフェミニズムの自立論、ジェンダー・フリー、男女共同参画といったドラスティックな社会変化が、自由や自立を手にしたはずの若い女性たちに深い心のひずみももたらしている

という事実のためである。もちろん、解消しきれない心身のストレスや精神的不安定さに苦しむのは女性に限ったことではない。だが女性の場合、精神形成に重要な家族関係において、母と娘という女性同士のつながりが、父と息子、ないし母と息子のそれよりも複雑であることが、最近の精神医学の進歩により明らかにされている。エディプス・コンプレックスを例にとるなら、息子は父親の存在によって母との関係を断念させられるが、娘は同性であるがゆえに母との関係性を容認されたまま成長してしまう、ということだ。こうした事実も、今回とくに母娘の関係をひとつの切り口として、それと背中あわせの男性問題をもふくめた現代人の「生きがたさ」を考える理由となっている。

社会人の内面の問題は、なぜ家族と関わっているのだろうか。それは「親密圏」とよばれる、いわゆる核家族内の人間関係が、家族の中に居場所をもつことで当人に自信をつけさせ、自尊感情をうみだすからである(斎藤純一(編) 2003『親密圏のポリティクス』ナカニシヤ出版も参照のこと)。ところが、この家族関係がくずれることで、自分の核になるものが欠落してひきこもりやうつ病に陥ったり、逆に対人関係において攻撃的になったりキレやすくなる。家でも学校でも常に競争をしいられ、意にそまないこともがんばりすぎるきらいのある子供たちはなおさらである。こうした精神的問題を抱えた子供がそのまま大人になったアダルト・チルドレン(AC)が、先のさまざまな自傷・他傷行為によって注目されているのだ。

そのもっとも典型的かついたましい事例として、1997年におきた「東電OL殺人事件」がある(佐野眞一 2000『東電OL殺人事件』、2001『東電OL症候群』新潮社など参照)。東電の総合職にあった女性が売春相手に絞殺されたこの事件には、キャリアー・ウーマンが男性優位社会で経験する苦勞と、家庭内での両親の問題とがあいまって、被害者がおこした自傷行為と他傷行為の両方がみられる。自傷行為には自身の身体を直接傷つけるばかりでなく、摂食障害、アディクション(酒・タバコなどへの依存)、そして売春や援助交際などもふくまれる。被害者は、10年ものあいだ夜間だけの街娼を続けることによって、いつ殺されてもおかしくない破滅の道をつきすすみながら、同時に家族に自分の売春をにおわせることで傷つけ、

虐待していたといえる(佐野眞一 2003 『東電 OL 殺人事件』と現代の性』『KAN』12号参照)。

この事件は若い世代一般の問題のみでなく、母娘関係からくる深刻な葛藤をも反映している。ここでは被害者の女性のみでなく、生まれや学歴に対して自信過剰となり夫すなわち被害者の父をおとしめる一方、お嬢様育ちで家事をこなすこともできず娘にも教えられなかった母親もアダルト・チルドレンである。そもそも、この母娘がそれぞれ属する世代は、自己形成や社会的立場に関する経験も大きく異なっている。母の世代は男尊女卑観や家父長制がはびこる社会で、家庭内に閉じ込められて悶々とした時をすごし、またそれだけに自立をかけて闘争してきた。しかし、その結果として娘の世代の方は、そうした矛盾や思考錯誤を経験した母親に育てられ、また常に自立の強要や女性性の否定にさらされて、当初の理想とされてきた「解放された女性」とは程遠い、悩み深い存在となったのである。そのことは、この殺人事件に共感をよせ、事件のあった地を詣でたりジャーナリストに長い手紙を書きおくれたおびたしい女性たちが、大半は第一線で活躍するキャリア・ウーマンや、幼児期に親から虐待をうけた人々であったという事実からも証明されている。

こうして、母が「今は男女差別のない世の中なのだから」とできなかったことを娘に託しながらも、セクシュアリティのレベルでは「女性として、人並みに結婚して子供もうまなければ」と自らの経験を強要し、母娘ともどもその矛盾にとまどいながら生きてゆかねばならない時代となった。かつての就職や参政といった社会参画から、趣味・教養、ボランティア・NGO活動・消費者運動、そしてトレーニングジムやエステ通いなど、自立をめざす女性の「自分探し」の方向性は時代にそって確実に変化している。しかし、それらの活動をもってしても、女性の、とくに若い世代の抱える不安やルサンチマンは未だ解消されていない。結局のところ、人間は常に自立しているわけではなく、また完全にセクシュアリティやジェンダーから切り離された存在でもないからだ。とすれば、フェミニズム運動が自明視した「自立」や「自己決定」といった価値観は改めて再検証される必要があるといえる。

これまでも、個々人の心理や精神的問題は、近現代における家族・親族の変容との関係から論じられてきた。しかし最近の研究動向では、女性の社会進出にともなってフェミニズムや女性問題を視点にすえた分析もふえている(チェドロウ 1978 『母親業の再生産』新曜社、フリーダン 1970 『新しい女性の創造』大和書房、竹村和子(編) 2003 『“ポスト” フェミニズム』作品社など参照)。その意味で、金井氏の議論は興味深く、硬直したジェンダー論や女性解放運動にふみとどまることなく、女性という「性」が抱えるリアリティを直視という営為に聴衆の共感が束ねられた。質疑応答時間にとどまらず、終演後も講師のもとにはたくさんの学生が集まり、真摯なおももちで議論を続けていた。

●第 30 回 (11 月 4 日) 「地雷除去に取り組む日本の NGO の挑戦」
今銚大介(NPO 法人「JAHDS = 人道目的の地雷除去支援の会」)

20 世紀は「戦争の世紀」とよばれるほど、さまざまな近代兵器を用いた世界的暴力が繰り返された時代であった。その負の遺産として、推定 6,000 万から 1 億 2 千万個の地雷とその数倍の不発弾(手榴弾、砲弾)が、世界の 60 カ国以上に放置されたままになっている。これらの地域にすむ人々は未だにその脅威から逃れられず、もとの生活に戻れない。今なお年間およそ 24,000 人が死傷の被害を被っている。

NPO 法人「JAHDS」(ジャッズ、人道目的の地雷除去支援の会 <http://www.2jahds.org>) は、軍事目的でなく人道目的からこうした地雷の除去を推進し、土地とその住民の生活を復興させる目的で 1998 年に設立された。国連、国際機関、NGO、被災地と連携しながら、東南アジア大陸部(タイ・カンボジアなど)を中心に、現地の人々がみずから地雷除去をできるようさまざまな後方支援をおこなう民間機関である。講師の今銚氏は、企業の社会貢献として JAHDS に参画する株式会社セコムから出向しており、この画期的な日本発 NGO の挑戦について精力的に報告・講演をおこなった。

地雷は第一次世界大戦で開発された近代兵器である。地雷のおもな生産国は先進国・軍事大国 54 カ国であり、一方、被害国となっている国々はほ

とんどがアジア・アフリカに集中している。対人地雷、対戦車地雷など約60種類ある地雷の負傷・殺傷効果はもっとも無差別かつ残虐で、その被害は被災者の家族までをもまきこんで半永久的に続く。さらに、戦時中の兵力をそぐだけでなく、その後も広大な土地が使えずに放置されることによって、国家全体の復興が遅れることにもなるのだ。1997年によくオタワ条約で対人地雷の使用・貯蔵などの全面禁止が決議され、日本も2002年には保有対人地雷の爆破処理を完了したが、この決議には肝心のアメリカ、ロシア、中国の3大軍事大国が参加していない。したがって、今後も戦争や紛争が続くかぎり、地雷被害者の総数もふえ続けると考えねばならない。

こうした地雷被害が軍隊のみでなく一般市民にも被害を及ぼすのはなぜだろうか。カンボジアを例にとると、地雷は軍隊や戦車が通過する要路や最前線のみでなく、地方の村落部でも民家のまわりや水場といった人々の最も集まる場所、また病院や学校など戦時中は兵舎や病院としても使われる公共施設にも多く埋められている。これら各所で、地雷に対して無防備な人々が日々被災することにより、その後の看護医療のみでなく、生活支援のための金銭的な負担までもが地域社会や国家にのしかかり、水道・電気などのライフラインの復興も困難となる。さらに、国民の8割が農民であるカンボジアのような国では、生計の基本となる農耕や森林資源の狩猟採集までができなくなり、その被害は計りしれない。

地雷被害の支援には様々な活動がある。すなわち、(1) 被害者の生活支援、(2) 「ふむとどうなるのか」などを地域社会に指導する回避教育、(3) 地雷の除去作業、そして(4) 地雷の廃絶運動などである。このうち、JAHDSの中心的活動は第3番目の除去完了にいたるまでのプロセスにあたる。まず地雷の埋まっている地域へ先行調査者が現地へおもむき、被災者や元兵士へのインタビューから残留物の種類などを特定する。次に、こうした地域には正確な地図がない場合が多いため、空撮をおこなって航空写真から地域周辺の地図を作成し、これをもとに活動に必要な情報を整理する。ここまでがすむといよいよ現場へ入ることになるが、通行困難な地形や障害物の多い往路に適切な移動手段を用意しなければならない。現場

へ到着すると、付近の草木をまず刈り取るなどして地雷処理活動がおこなえるように整える。こうして地雷探知がようやく開始されるわけだ。

JAHDS は路面下の空洞探査という日本のベンチャー技術を活用した地雷探知の開発にとりくんできた。従来地雷除去のためにつかわれていた金属探知機や、火薬のにおいをかぎわける「地雷犬」などには、地雷以外の金属にも反応する、雨季には活動できない、トレーニングに膨大な時間とコストがかかるなどの制約があった。こうした諸問題を解決するため、JAHDS の参加企業が共同で、材質によらず地中の物体を可視化する「有効な目」、すなわち新型地雷探知機「マイン・アイ」を開発した。2002 年 3 月から導入されたこの画期的な方法を、従来の探知機や地雷犬と組み合わせることにより、作業の効率は大幅にアップしている。しかしそれでもなお、世界中に埋められた地雷を除去するためには、1000 年という気の遠くなるような時間がかかるだろうといわれている。また除去に携わる現地の人々の安全も考えて、作業は慎重に進められなければならない。発見された地雷は信管を抜いて不活性化させるか、爆発させて処理する。一定の範囲が完全に除去されると、浄化された土地をどのように利用するかについて JAHDS と現地の人々とで話しあい、その要望をもとに学校の開設や井戸掘りなどの地域復興が推進される。

地雷の除去技術をはじめとする諸活動は継続され、次世代に引き継がれていかなければならない。外国語の習得や知識を海外でのボランティア活動に役立てたいと考える本大学の学生に対して、活動に関心をもつ若い日本人が増え、被災地と日本との架け橋になることも JAHDS のめざす目標のひとつであることが講師からいま一度強調された。

- 第 32 回 (12 月 15 日) 「ゴビの馬頭琴弾き ネルグイ 日本ツアー 2003」
ネルグイ(馬頭琴奏者)、西村幹也(モンゴル研究者、モンゴル情報紙「しゃがあ」代表)、嵯峨治彦(「のどうたの会」代表)、田中考子

「ゴビの天才」と謳われた馬頭琴奏者ヨルドン・ネルグイ氏の日本ツアーが、モンゴル研究者の西村幹也氏、喉歌では日本の草わけ奏者である嵯峨

治彦氏や田中孝子氏の主催する「のどうたの会」などの尽力で、2003年11月から12月までの約1ヵ月半にわたっておこなわれた。そのツアーの終盤にあたる12月15日、当大学での実演奏をまじえたスライド・トークや馬頭琴伝説の語りなど、もりだくさんの公演がおこなわれ、大盛況を博した。

内モンゴルの伝承「スーホの白い馬」で日本でもなじみの深い民族楽器の馬頭琴(モリンホール)は、モンゴルの近代化にしたがって半世紀ほど前から急速に舞台芸術化したといわれる。現在のプロ奏者の大半は専門機関でいわゆるクラシック音楽に基づく教育を受けており、海外で活躍したり、CDをリリースするなど、伝統芸能であったこのジャンルに新たな可能性をひらいてきた。

こうした動きの中で、ネルガイ氏は独学で奏法を極め、全モンゴル馬頭琴大会で金メダルを4つ、銀メダル2つ、銅メダル3つを受賞した数少ない芸術家である。氏は社会主義時代は劇場勤めの演奏家としても活躍していたが、モンゴルの民主化後は故郷のドンド・ゴビに戻った。北極星勲章(モンゴル文化省最高勲章)まで受章した氏は、いまやモンゴル国の第一文化功労者であるが、普段は家族とともに遊牧生活を送り、親族や友人に頼まれるたびに演奏を披露するという昔ながらの生活を続けている。

ツアー公演は、モンゴルの遊牧民の暮らしや自然観について、西村氏が自身の現地調査で撮影したスライドをもちいながら講演することで開幕した。ついで第2部では、まず嵯峨氏の演奏をバックに、外モンゴル版スーホの白い馬にあたる「馬頭琴伝説ジョノン・ハル」の語りが田中氏によって上演された。続いて、いよいよネルガイ氏の馬頭琴ソロが披露され、氏独特の奏法と醸しだされる豊かな風情に会場は魅了された。さらに嵯峨氏とのデュエットもおこなわれ、合間には、ひとつの喉から複数の音をだす喉歌(ホーミー)も披露された。

会場はダイナミックでおおらかな中にも哀調を帯びた繊細さのある馬頭琴の音にひととき酔い、ツアー公演は本年度の最後を飾るにふさわしい催しとなった。

〈以上、奥島美夏・本学異文化コミュニケーション研究所〉